
機動戦士ガンダムSEED DESTINY ~裏切りの救生主~

松本

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダムSEED DESTINY 裏切りの救生主

【Nコード】

N8804B

【作者名】

松本

【あらすじ】

二度に渡る大戦から一年過ぎた。だが、世界は今だ迷走を続けている。人は何故戦うのか、戦士達の見据える先には何があるのか。

プロローグ（前書き）

機動戦士ガンダムSEED DESTINYの続編という形で書かせて頂きました。

ガンダムを知らない人にはさっぱりだと思います。

プロローグ

C・E・75

運命の戦士達が人類史上、恐らく最悪の結果を招いていたであろう計画を阻止してから一年が過ぎていた。

C・E・70に勃発した『血のバレンタイン』の惨劇により迷走への一路を辿っていた戦争は、モビルスーツ、PS装甲などの戦術的改革により本格的な武力衝突へと突入する。

だが、望まれない戦いは『第二次ヤキン・ドゥーエ攻防戦』、『ダークネルフ戦線』等の激戦の果て、様々な理念と想いの交錯の中に終結を迎える。

その仮定で

『パトリック・ザラ』

『ラウ・ルウ・クルーゼ』

『ムルタ・アズラエル』

『ロード・ジブリール』

『ギルバート・デュランダル』

己が宿命、縛る運命、望む未来。

それらに魅了、支配された思想、野望家達は真の平和を見い出した者の手によって星の海へと還っていった。

世界の運命をを左右する争いは消えたものの、失ったものの重さは計りしれない。

短期間の内に連続して起こった大戦はナチュラル、コーディネーターの双方に深い悲しみと怒りを刻みつけるには十分であった。

平和へと向かう世界の現状を妬み、快く思わない者達は悪戯に反乱を増長し、牙を剥く。

二つの大戦の残り火は今尚、世界を包み、それは更なる驚異として噴き出そうとその力を蓄えていた。

それだけはなんとしてでも防がねばならない。

数多くの犠牲の果てにようやく手にした平和なのだ。

これ以上の涙は見たくない。

現プラント最高評議会議長の座に着いた『ラクス・クライン』。

オーブ連合首長国代表首長として絶大なる支持を得た『カガリ・ユラ・アスハ』。

二人の少女は大戦の停戦を地球、プラントへ迅速に進めた後、地球連合の一極支配の起因でもある『世界安全保障条約機構』を解体した。

そして、新たに『世界首脳議会』、俗に言う『WSO』を発足。二人はそこで『世界同盟条約』の草案をかがげる。

これは、従来通り核の使用不可、オーブを筆頭とする中立国への不可進、そして、二度の大戦の折りに獲た領地の解放を提示していた。これには大西洋連邦の強い反発を受けたものの、大多数の賛成に連邦側が折れることとなり、めでたく発足となる。

プロローグ（後書き）

そのうち長くやっているときますので、よろしく願います。

1・平和を唄う者(前書き)

まだまだ戦闘はないですね(苦笑)
気長にお待ち下さい

1・平和を唄う者

その頃、世界各国で発生する争いを止めるため、大戦の英雄『キラ・ヤマト』、『アスラン・ザラ』、そして彼らと志を共にする仲間達は真の平和の為に剣を振るい続けていた。

彼等は鋼の天使を駆り、それらの野望をひとつ、またひとつと撃ち抜き、砕いて行った。

次から次へと、まるで途切れる事を知らない反乱に辟易しながらも彼らは戦い続けた。

そして慢性的かつ惰性的とも言える戦いにも、やがてその終りが見えてくる。

プラントと地球、ナチュラルとコーディネーター。

二つの種族が一丸となり世界の為に戦う姿は人々の胸を打ち、長らく横たわっていたわだかまりを少しずつ溶かしていった。

キラ達が勝利する度、人々は歓声を上げ、近付いてくる平和を噛み締めていた。

だが世界が真の平和へと向かい、人々の笑顔が広がっていく最中、悲劇は起きる。

翌年 C・E・76 6月10日

後に言う『第4次バルト海戦』にて、世界の死と混沌の歯車がゆっくりと周り始める。

悪夢の様な戦いから一年。

今だ世界には安息は訪れていない。

各国家の政治バランスの崩壊、占領地の解放、その混乱に乗じて再び戦火を広げようとする反乱軍。

ザフト、地球連合は全勢力を持ってこれを制圧していく。

ユーラシア連邦とアフリカ共同大国の国境に面する位置にバルト海はある。

そこは今、恐らく数多く存在する反乱分子の中でも一際強大な組織『ベターメンツ』と名乗る者たちの拠点があった。

ベターメンツの根城は大戦時に大破した空中戦艦を要塞に改造したものであり、積まれていたモビルスーツ50体がまるごと奪われてしまったのである。

改変を意味する名を持つ彼等がバルト海を拠点に選んだのには理由がある。

バルト海は最深部500mと近海と比べてかなり深いが、陸付近は

僅か数十mしかないと付近に軍事基地はなく、また巨大戦艦が停泊することも不可能であった。

地球、ザフト連合は幾度も攻略戦を仕掛けていたが、その結果は悪戯に被害を増長したと言っても差し支えないであろう。

空中戦艦以外の突入が不可能であることからモビルスーツ部隊も回収、帰還の都合上、空戦用モビルスーツの使用を余儀なくされてしまふ。

圧倒的不利な状況を打開すべく、英雄達に白羽の矢が立ったのは必然かもしれない。

1・平和を唄う者(後書き)

次回ようやく人ができます……

2・キラの苦悩(前書き)

ようやく人間ができました(苦笑)

2・キラの苦悩

明朝、夜明け前のバルト海沿岸。

漆黒が支配する中、月の光がライトブルーの海へ降り注ぎ、幻想的な雰囲気をかもしだしていた。

その十数m上空では、生ける伝説と化した戦艦『アークエンジェル』が静かにベターメンツへと舵を取っている。

そして、その上部デッキでは、一人の少年が沈痛な面持ちで手摺に体を預けていた。

水平線の向こうにいるであろう太陽を待つかの様に、彼……『キラ・ヤマト』は視線を海の彼方へと向けている。

キラの心の中では様々な想いが浮かんでは消え、彼の苦悩を更に深めていった。

史上最強のコーディネーターを産み出す実験の唯一の成功例。それがキラ・ヤマトだ。

彼が操る自由の大天使は、凄まじい戦闘能力を誇っていた。彼が覚醒すれば、針の穴を通す様な精密な射撃、武力のみを奪う不殺の光刃。十枚の羽根を翻し戦場を駆ける様は圧巻の一言に尽きる。

他のコーディネーターですら、キラの前では赤子も同然なのだ。

だが、キラは争いを憎んでいた。

自由を愛し、平和を慈しむ心穏やかな少年が世界を救ったと何人の人間が知っていたいよう。

真の平和の為に剣を手に取り、敵を切り裂く。

そう決めたのはキラ自身であり、その信念が揺らぐ事はない。

だが、それでも戦場にこだまする悲鳴、耳をつんざく爆音、自分を呪う声に心は乱され、言い様のない感覚が背中を這う。

そして、それを産み出しているのは自分自身なのだ。

当然、それは仕方のないことだと頭では理解している。

望む未来が違うのなら、どんな手段であろうと相手からもぎ取るしかない。

それが戦争、自分の立つ場所なのだ。

敵がない戦争なんてない、犠牲がない戦争なんてある訳ない。

もし、それを望んだとしても所詮は自己満足の犠瞞に過ぎず、自分の命を脅かすだけだ。

射たなければ射たれ、殺らなければ殺られる。

それが嫌なら死ぬか逃げるしかない。

結局の所…僕は弱いんだ…。

とキラは思った。

伝説とまで言われた『フリーダム』を駆り、大戦を終りへと導いても、ラクスやカガリの強さには到底及ばない。

自分はただ守るだけで精一杯で、人々を支え、道を示す事などできはしないだろう。

事実、人々が求めているのはキラではなく『英雄が駆るフリーダム』なのだ。

それならば……僕は誰なんだろう……？

戦争が終われば……僕は？

キラの中で、戦いへの迷いが首をもたげる。

2・キラの苦悩（後書き）

次はアスランかな？

3・アスランの答(前書き)

ようやく対話に入りました。ダルダルですいません

3・アスランの答

どれくらいそうしていただけるか。

キラの苦悩は深まるばかりで、何の光も見えてこない。それとも、
答えなんてないのだろうか。

キラの目の奥が突然の光にチクツと痛んだ。

ようやく、夜が明けるらしい。水平線の向こうから溢れる光は瞬く
間に世界を一変する。

この日が一番高い所に来るとき、また戦いが始まるのだ。そう考え
ると太陽にさえ感情をぶつけたくなる。

その時、キラの背後でデッキパネルが開く音が聞こえた。

「キラ！」

馴染みのある声にキラが振り向けば、そこには軍服に身を包んだ青
い髪の少年。

「アスラン……」

デッキの影を抜けたアスランは日の光に赤く染まり、緑の目が淡く
輝くのが見える。

キラの消沈した声にアスランは何かを感じたが、逆光に埋まる表情
を読むことはできなかった。

「ここにいたのか……捜したぞ。艦長が呼んでいる。おそらくベターメンツの件だろう」

「マリユールさんが？……うん、わかった……」

やはりと確信する。キラの様子が明らかにおかしい。アスランは聞かないではいられなかった
戦いを前にこの有り様では……。

「どうかしたのか？」

キラはアスランに背を向けると、再び手摺に体を預けて燦然と輝くバルト海を見下ろす。

その背中はとても悲しく、辛さを感じさせた。それはキラが背負うものの重さなのかもしれない。

「うん、少し考え事をしてたんだ」

アスランは何も言わずにキラの側に立ち、同じ様に海を眺める。潮風が頬を撫で、遙か後方へと広がっていく。

何も聞いてこない友にキラは感謝しつつも、答えが見つからない焦燥だけが募っていく。

気がつけば、キラはアスランに彼自身の疑問をぶつけていた。

「ねえ、アスランは何の為に戦うの？」

アスランは朝焼けに照らされた横顔をチラリと見ると、手摺に背を預けて答えた。

「自分の為…なんだろうな、きつと」

大切な人を守る為、自分の居場所を守る為、平和な世界を取り戻す為。

自分が悲しみたくないから、傷つきたくないから。それは願いでもありワガママな欲望でもある。

我ながら情けない答えだな。アスランは自嘲した。

それでも、俺には命を賭けるに値する理由だ。

3・アスランの答（後書き）

キラとアスランの会話らしくなってるでしょうか？出来たら感想を
お願いします。バリバリ頑張れるので（笑）

4・軍人は辛いよなあ（前書き）

少しコメディーかもしれない（苦笑）

4・軍人は辛いよなあ

「うん……」

キラは否定も肯定もしない。アスランは怪訝そうな顔でキラに視線を送る。

意外だったのだ。

てつきり肯定してくれるもねとばかり思っていたのに。

いや……アスランは首を振り、その考えを振り払った。

キラが俺の考えを理解してるなんて思っちゃいけない。キラの考えはキラにしかわからない、俺とキラは別の人間なんだ。

だからこそ二人は何度も道を違^{たが}え、刃を交えたのだ。そして……だからこそ想いを共有する度に二人は一つになり、絆を深めて成長してきたのだ。

「アスラン？」

キラは急に黙り込んでしまった親友におずおずと声をかけた。ひよつとして、自分は怒らせるような態度を取ってしまったのだろうか？いつになくそっけない態度をとってしまったし。

キラの呼び掛けにアスランはゆっくりと首を回し、眩しそうに微笑んだ。

「えっ…ええっ？」

まさかアスランが自分の事を考えていたとは知らないキラは、笑顔の意味がわからず戸惑うばかりだ。

そんなキラがおかしくてアスランは声をあげて笑う。端から見れば何とも、平和な光景だろう。

「おいおい……なあにほんわかムード作ってだよ」

突然降って沸いた声に二人はデッキパネルを見る。すると、そこには金髪で精悍な顔立ちの青年が呆れた様な顔で腕を組んでいた。

「ムウさん！」

「フラガ少佐！」

「よっ、おはようさん」

ムウは片手をヒラヒラさせながらアスランの背後に回ると、いきなりヘッドロックを仕掛けた。

しかもご丁寧にゲンコツで頭をグリグリしている。

「フラガ少佐っ！ 離して下さいっ！」

アスランは締め上げてくる腕をバシバシ叩いて声を絞り出す、聞

き入れてくれる様子はない。

「悪いが、艦長命令でね。仕方なくやってるんだ。『呼び出しをサボったアスラン君に厳罰を』ってな。そういう訳で恨むならマリユー艦長を恨んでくれよう」

確かに自分はキラを呼び出す命を受けていたし、怠慢だったのも認める。だが、これとは別の問題だ。

「いや、俺もこんなことはしたくないんだがなあ、艦長の命令だからなあ」

嫌がっているとやっている割にはぐいぐい締めてくる腕を押さえつつ、アスランは親友に助けを求めた。

「くっ…キラ！ 君も見えてないで少佐を止めてくれ！」

だが、キラは爽やかな微笑みをたたえたまま、まるで動こうとしない。

「ごめん…僕もマリユーさんには逆らえないんだ」

「軍人は辛いよなあキラ…ま、そういう事でしばらく堪えてくれ」

アスランは遠のく意識の中で理解する。キラはさっきの事を根にもっているのだと。

4・軍人は辛いよなあ（後書き）

まだまだ戦闘には行きそうにないです（苦笑）

5・朝焼けに浮かぶ（前書き）

地味に風邪を引きました（苦笑）

頭が痛い中書いたので少しおかしいかもしれません。

あ、それから何でもいいので感想があれば気軽にして下さいね（笑）
頑張れ、だけでも構いませんので。多分頑張りますよ!?

5・朝焼けに浮かぶ

「よし、俺はブリッジに戻るからな。早く来いよ」

息もたえだえのアスランの背を叩いたムウはそう告げると、ゆったりとした動きでデッキパネルに向かう。

「ムウさん！」

遠ざかる背中にキラが声をかければ、ムウは何だ？と云うように顔だけをキラに向けた。

キラは少しの間躊躇う素振りをみせ、やがて意を決したようにムウを見据える。

その口からは先程アスランにぶつけた問いが出た。

「ムウさんは……何の為に戦うんですか」

ムウはキョトンとした表情を作り、口の端をつり上げるとデッキパネルの向こうに消える。ただ一言、

『愛する人と暮らせる平和を作る為だ』

そう残して。

ムウ・ラ・フラガ、ネオ・ロアノーク。

二人の人間として、一人の女性を……その身でかばった男とすれば

それは当然の答えなのかもしれない。
ただ、キラには何かはぐらかされた様に聞こえた。

キラは釈然としないまま、青が増した空を見上げる。

月があり星があり太陽があり、明るく暗く、赤く青くて黒い。全ての特徴をないませにした夜明けの空は、キラな心そのものだった。

「なんだろう……はぐらかされちゃったかな……」

声を出してみれば、その疑いはますます濃く感じてしまうのはなぜだろう。

そう思うのと同時に、親友の事を思い出す。

果たしてアスランを見れば、手摺にしがみつき必死に立ち上がるうとしていた。

「アスラン……大丈夫？」

「くっ……キラッ！」

何を今更とばかりにキラを睨めば、そこには首を傾げる友の顔。
アスランの中で熱は急速に醒めて行く。

この顔は……反則だっ！

「いや……もういい。さあ、早く行こう、もう待たせる訳には行かないだろう」

もう厳罰はこりこりだとも言うようにアスランが眉をひそめれば、キラとしては苦笑を浮かべるしかなかった。

「うん……そうだね。じゃあ……行くつか……」

「キラ……」

これから戦場に赴くのだと再認識したキラの顔にかけりがよぎる。

「何？早く行かないと」

「大丈夫だ」

キラを遮り、アスランは続ける。

「お前の答えは俺にはわからない、それはキラ自身が見つけるしかない」

「あ……うん……」

「好きに動けばいい。それでも道に迷うなら、俺がキラを
迎
えに行く」

「……うん」

キラが頷いたのを確認すると、アスランは微笑みを浮かべてキラを見つめた。

5・朝焼けに浮かぶ（後書き）

前書きに書いた通りですっ（笑）

酷評、評価、評論、感想……何でもいいので余裕のある方は考えて
くださいね（笑）

さしでがましいのは重々承知してますが……無反応って不安なんで
す（苦笑）
すいません（礼）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8804b/>

機動戦士ガンダムSEED DESTINY ~ 裏切りの救生主 ~

2010年12月28日03時02分発行